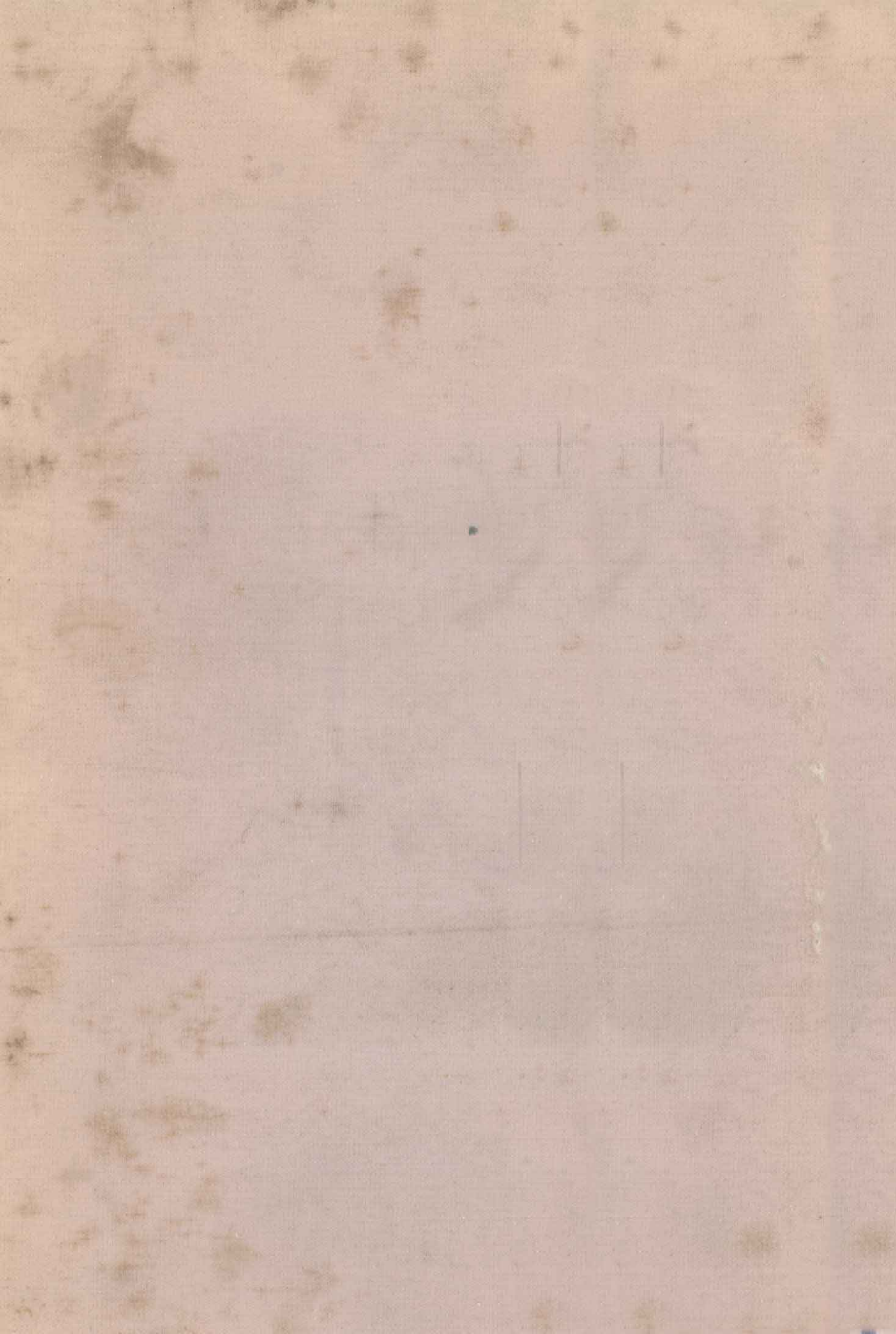
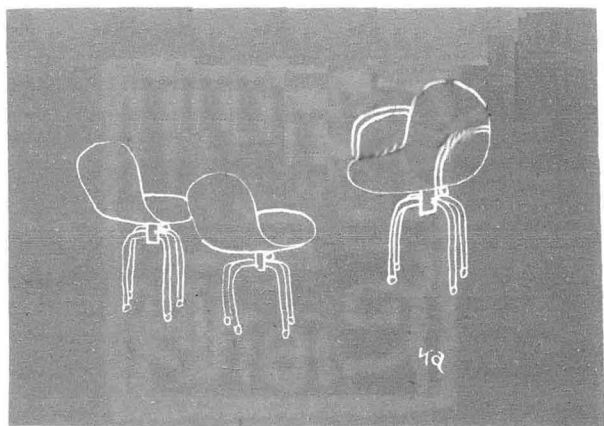




課長昇進

源氏鶏太



東方社版

進 昇 長 課

(乱丁・落丁の場合はお取替え致します)

昭和三十八年十二月二十日発行

定価三二〇円

著 者 源 氏 鶏 太

発 行 者 石 渡 磨 須 子

整 版 者 内 田 柳 次 郎

東京都文京区高田豊川町六〇
発 行 所 東 方 社

振替東京五七七四番
電話大塚四一八七三番
七〇三六番

(印刷・邦文堂印刷所)

課
長
昇
進

源
氏
鶏
太

目次

課長昇進

5

他人の事

83

ダブルベッド

113

自慢の息子

141

ある
転
勤

異
議
な
し

立
派
な
青
年

あ
と
が
き

157

191

225

251

装
幀

風

間

完

課
長
昇
進

「経理課長を命ず。」

夢にまで見て来たこの辞令を、私は、ついに貰うことが出来たのである。しかし、正直に言えば、まだ夢心地であつた。

（俺が、とうとう課長に……）

信じていいのだろうか。しかし、辞令の文句は、まぎれもなくそれを証明している。

（ああ、俺が、課長に、経理課長に……）

足が宙に浮いているようだった。不覚にも辞令を持つ手が、ふるえて来そうで、困つた。

近頃では、八百屋とか肉屋の主人だつて、社長の名刺を振りまわしているとか。ましてや、課長なんて、世間にはザラに、いや、くさるほどたくさんいるのだ。この会社だけでも、十数人の課長がいる。更に、その上に、部長、取締役部長、常務取締役、専務取締役、そして、社長、といるのだ。仰いで見れば、気の遠くなるような距離である。だから、たかが課長になつたくらいで、そんなに感激するなんてと、人は嗤うかも知らない。しかし、いくら嗤われても、私は、嬉しいのだ。躍り上りたいほど、嬉しいのだ。ましてや、部長になるためには、その前に、課長になつておかなければならぬのである。といつて、私は、おいそれと部長になれると思つてゐるわけでない。いや、昨日まで

の私は、そういうこと、夢にも考えなかつた、といつてもいいだろう。しかし、かりに、そして、万に一つ、部長になれるとしたら、今まで以上に茨の道を歩かなければならぬに違ひなからう。そういうことは、想うだけでも、ぞうつとしてくるようだ。

(しかし……)

そう、しかし、といいたいのものが、すでにして、私の胸の奥底で動き始めているようであつた。

世間には、いや、この会社にも、一流の大学を卒業して入社し、あとは出世コースを歩き、やすやすと、そして、当然のように課長になり、部長になり、取締役になり、していく人は、すくなくない、周囲も亦、それについて、とやかくいわないのである。また、そういう人に限つて、社内にも有力なコネを持つていたりするから、まさに、鬼に金棒である。幸せな人たちなのである。

ところが、私は、違ふのだ。二流の私大を卒業したに過ぎないし、勿論、コネなどという重宝なもの持ち合わせもなかつた。お世辞のうまい方でなかつたし、才能にしたつて、月並である。自分では、これで相当の才能があるのだが、と密かに思うこともないではない。だが、しかし、一般に通用しない。とすれば、要するに月並を決めておくべきであらう。容貌は、特に人の好感を呼ぶようには出来ていなかつた。寧ろ、醜男ぶおとこ、とあつさり自分で認めておいた方が、いつそ、気が楽である。したがつて、社内の女たちからチャホヤされたことなんか、いつべんもない。それでも、恋愛結婚にあこがれて、人並に恋愛をしたこともあるのだが、あつさり振られて、そのときは、泣きの涙で暮した。

あとで、私を振つた女が、

「あの顔で、あたしにプロポーズするなんて、厚かまし過ぎるわ。」

と、いいまわつていると聞かせてくれた人があつて、以来、容貌についての自信は、皆無になつてしまつた。

結局は、親の決めてくれた今の妻と、平凡に見合結婚をした。今では、二人の子供の父親となつてゐる。二人とも、私に似ていて、ふつと哀れに思うこともあるが、どうにもならない。子供には子供の運命があるのだ、と思うことにしている。

私は、四十七歳である。入社して二十二年目に、やつと、課長になれたのだ。勿論、入社二十二年目の課長というのは、遅い方だ。恐らく、この会社では、あんまり前例がないだろう。たいていそれまでに、課長になる男は、なつてしまつていのである。同期に入つた高瀬なんかは、七年も前に課長になり、昨年部長になつてゐる。恐らく、あと一、二年のうちに、取締役部長ということになるだろう。

しかし、入社二十二年目でも課長になれたのは幸せな方で、先輩の中にも、いまだに課長にもなれないで、係長で我慢していたり、調査役室勤務といった閑職に追いやられてゐる人がすくなくない。とにかく、五百人の社員の中で、課長というのは十数人しかないのだから、まさに狭き門である。が、私は、その狭き門を遅ればせながら通り抜けることが出来たのだ。漸く、芽が出かつたのだ。

それを思うと、不遇な先輩たちに悪いような気がするのだが、しかし、サラリーマンの世界で、そういう遠慮は、全く無用であるばかりでなく、逆に、大きなマイナスになる場合のことを、私は、百も承知している。

とにかくにも、私は、ついに課長になれたのである。今後の私に必要なことは、あくまで、課長らしく振る舞うことであろう。幸いにして、経理の仕事には、豊富な経験を持つている。ついでに、多少の自信を、といつておきたいのだが。それにしても、私は、どうして課長になれたのであろうか。

私は、過去二十二年間のサラリーマン生活の大半を経理畑で暮している。やつと、係長になれたのは、三年前であつた。高瀬は、その四年も前に課長になつていたのである。あまりにも、差があり過ぎる。高瀬は、私なんか、歯^{しが}牙にもかけぬ素振りを平気で見せてくる。私は、そういう高瀬に、ある反撥を感じたのは、せいぜい五年ぐらい前までで、以後は、比較をする自分の方が間違つてゐるのだとあきらめるようになっていた。また、社内で、私と高瀬が同期生であることを知つてゐる者でも、二人の差を当然のように眺めるようになっていた。しかし、私は、一方であきらめつつ、一方で、せめて五十歳までに課長になれぬものだろうかと、思つてもいたのである。それが、予定より三年も早く課長になれたのだ。これで、どうして、天にも昇る気持にならないでいられようか。辞令を持つたまま、半信半疑の夢心地でゐるのもおかしくない筈だと、自分では思つてゐる。

経理課長の山根は、半年ぐらい前から病気で休んでいた。山根は、出世コースを歩いて来た男の一
人で、私より三年も後輩であつた。そういう男を、

「課長、課長。」

と、あがめて呼び、こちらは、逆に、

「小沢君。」

と、君づけで呼びつけられる屈辱感は、いくらなれていても、やつぱり当事者でないと、本当のこと
とはわからないだろう。

これをあきらめるといふか、達観するといふか、そういう境地に達するには、ある程度の歳月を要
するものである。ましてや、山根に、こちらから頭を下げたくなるような手腕力量が認められなかつ
たのだから、なおさらのことであつた。私の見るところでは、山根は、要領だけで、出世コースを歩
いて来たような男であつた。尤も、要領がいい、ということも一つの才能には違いなかつたろうが。

しかし、山根には、部下のほまれを自分のほまれとし、自分のミスを部下に押しつけるようなところ
があつて、私は、好きにも、尊敬する気にもなれなかつたのである。しかし、課長であることには変
りがないのだ。ましてや、将来、部長になり、重役になつていくだろう男なのである。私は、いつだ
つて、そのいいなりになつて来た。時には、議論をしたが、結局は、課長風に吹き飛ばされて、そう
いう口惜しさは、酒でまぎらわして来たのである。

その山根が、結核のために長期療養を要することになった。私は、内心ほつとした。だからといって、その後任に、私がなれようとは思わなかった。いや、なれたらどんなに嬉しいだろう、と思つたことがある。家内に、そのことを寢物語にいつたりした。

「でも、ダメなんでしょう？」

私よりも、家内の方が、そう思い込んでいるようにいつた。

「そう、ダメに決つてゐる。」

私も、あつさりそう答えた。

「でも、出世が出来なくても、家庭が円満であるから、それでいいですよ。」

たしかに、私たちの家庭は、一応、円満であつた。私は、酒が好きだが、そう深酒をするわけなし、十二時過ぎまで飲んで帰ることもなんか、めつたにない。金が特にあるわけでなく、こういう顔だから、浮気ということについては、初めからあきらめていた。

「そう。が、やつぱり、出世がしたいのだよ。」

「わかるけど……。だつて、出世をすると、たいていの家庭は不幸になるらしいわ。あたしは、そんなの嫌よ。」

家内は、強くそれをいつた。私は、自分自身を納得なつとくさせるために、それもそうかな、と思つておいたのである。が、私が課長に昇進することは、所詮無理だとしても、せめて後任には、私よりも先輩

で、しかも、人格手腕ともに尊敬出来る人物に来て貰いたいもの、と思つてきたことはたしかなのである。

二

山根が欠勤中、係長である私は、辞令なしで課長の仕事を代行させられた。私としては、大過なくやつたつもりである。が、今日にも、新課長がくるか、明日にも、と思ひながらこの半年間を過して来たのであつた。そして、課員たちも、私同様に、あるいは、私以上に、私が課長に昇進するとは信じていなかったに違ひない。すでに、私は、そのような目で眺められていたのである。しかし、係長であつて、昇進の見込みもなく、課長の仕事を代行させられるのは、およそしつくりしないものである。どうしても、課員たちに遠慮をする。そして、課員たちも、どうせ、本物の課長でないのだから、それを当然のように思つている。その癖、課としての一泊旅行に出かけるときには、

「一つ、課長並に一万円のご寄附をして下さいよ。」

と、いつて来たりするのである。

私は、嫌とはいへなかつた。係長としてなら五千円ですむのだ。その癖、私は、課長の仕事を代行している間、一円の特別給与も受けていなかったのである。

また、仕事のことで、課員に注意したりすると、時には、

「しかし、病氣をしていられる課長からこのようにいわれられているんですよ。」

と、逆襲されたりした。

そういう場合、私は、本当の課長でない情けなさに、強いことがいわれず、

「そうかね。」

と、そのまま、引つ込んでしまうこともあった。

恐らく、こういう気の弱さが、今日まで、私を係長にとめておいた原因の一つになつていたのであろう。

しかし、以上のことは、課内だけの問題なのである。それほど、気になることはなかったのだが、対外交渉となると、正式の課長でないことが、事々に不利な結果を招いた。

また、この会社には、課長会というのがあつて、月に一度、会議室に集まつて、昼食を共にすることになつていた。目的は、各課の連絡をスムーズにするためである。私は、係長に過ぎなかったが、特に部長から代理として出席しておくように、といわれた。

最初るとき、私の席も、また、昼食の用意もしてなくて、私は、ひどく嫌な思いをさせられた。流石に第二回目からはそういうことがなくなつたが、しかし、そういう席での私は、自分でもみじめであつた。そのほとんどが、将来、部長になり、重役になるのだと気負っている若手の課長連中なのである。そういう中に入ると、私は、およそ将来に見込みのない老兵のように見えてくるのだ。私は、

出来るだけ発言を控えて、聞き役にまわつた。しかし、経理課に關係のあることだと、責任上からも発言しないわけにいかない。が、たいていの場合、私の発言は、いい加減にあしらわれた。私が、ムキになればなるほど、そういう雰囲気になつて、結局、不本意な沈黙を強いられるようになった。だから、私は、課長会のある日は、その朝から、いや、その数日前から憂鬱であつたりした。どうせ、課長になれないのなら、一日も早く、正式の課長を決めて貰いたい、と思うようになっていた。その方が、気楽なのである。

とにかく、私は、いつの間にか、あらゆる面で、事勿れを願う氣持の強い男になつていたことはたしかである。しかし、かつての私は、こうでなかつたのだ。覇氣があつたし、一応、将来の希望に燃えていたし、元氣があつたのだ。

次のような思い出がある。

入社して、五年目ぐらいであつたろうか。取引先の大招宴が熱海であつて、私も、その接待役の一入としてかり出されたのである。私は、私なりに、一所懸命にやつたつもりであつた。が、総務課からの連絡が不十分だつたので、客の部屋割にミスがあつて、すこし混乱を來たした。それは、かならずしも私のミスでなく、寧ろ、総務課員のミスというべきものであつた。にもかかわらず、近松総務課長は、多数の乗客や女たちの前で、私をボロクソに叱りつけたのである。近松総務課長としては、乗客の手前、そうせざるを得なかつたのであろう。それなら、私にもよくわかるのだ。だから、私は、